アフリカ最西端のダカールにて

国立国際医療研究センター　国際医療協力局　連携協力部
展開支援課長　江上由里子

30代前半の中南米から始まり、途中日本での仕事を挟みながら中近東、南アジアと赴任したのち２年半東京に勤務した私の次の赴任地はパリ・ダカール・ラリーのゴールだった、西アフリカのセネガル共和国の首都、ダカールでした。セネガルの保健省には過去10年以上にわたり大臣官房技術顧問が派遣されていて、私はその５代目でした。保健省の現在の政策、戦略、計画に基づいて保健システム強化に貢献しユニバーサルヘルスカバレッジ（UHC）に資するように日本の協力が保健開発政策に沿って効果的・効率的に形成・実施されることを目的に、技術支援や様々な調整を行うことが私の業務です。

25年前にNGOの難民キャンプ支援に短期で参加した以外には、本格的にアフリカで仕事をするのは初めてでした。フランス語圏でフランス語で仕事をするのも初めてで、加えて日本を出発する２日前に人生初の骨折をし、車椅子と松葉杖での赴任でした。50代で始めたフランス語、セネガル人の顔が皆同じに見えてなかなか顔と名前を覚えられない、加えて車椅子。三重苦で始まったダカール生活でした。

車椅子での赴任は、ダカールにたどり着くまでは大変でしたが、ダカールでは意外にも悪いことばかりではありませんでした。首都ダカールの道路は日本のように歩道もなく平坦でもなく、フランス統治時代に建設された古い建物でなくてもバリアフリー対応になっていませんが、段差や階段で「あれ、どうしよう。」と思うやいなや、体格のいいセネガルの人々がどこからともなく手を差し伸べてくれます。人々の助けによるバリアフリーは心温まるものでした。私の三重苦の２番目（人の名前と顔を覚えられない）とは対照的に、赴任時に車いすで保健省内の局長や関係者に挨拶に行ったために、相手からは「あの車いすであいさつに来た日本人」として覚えてもらえました。

2017年８月　仏語圏保健人材管理ネットワークの会合にて。（小職（前列左）は骨折中）

第一の三重苦（フランス語）はずっとついてまわりました。もともと言語能力が高くない私が50代で本格的に始めたフランス語能力は、新しい人々の中に入っていく際の劣等感として足を引っ張っていたように思います。「solidarité」（連帯感）のセネガル社会で明るい、サポーティブなセネガル人に支えられ、徐々に業務を進められるようになりました。医療保険制度を導入しようといち早く動いているセネガルの高官と一緒に私も日本の医療保険制度の歴史を学ぶ機会もありました。

あれこれ浅く広くの仕事の中で、敢えてまとまった成果としては、西アフリカ諸国で罹患率の高い子宮頸がん対策への支援をしました。子宮頸がんは、HPVワクチンや検診による前がん病変の発見と治療という有効性の証明された介入で予防でき、費用対効果が高いにも関わらず、それによる死亡は今や妊産婦死亡よりも世界、とくに低中所得国で高く

関係者で子宮頸がんの研修のための教材作成中

子宮頸がん検診の研修実施後２ヶ月、保健所を訪問してヒアリングを行います。（右手が保健所長、左が保健省職員）

なっています。検診で早期に見つかれば治るものが症状がすすむまで気づかれずにいて進行してから受診して助からない例が多くあり、ワクチンの普及とその効果を待たずに現在20代、30代の人たちの早期発見につなげるべく、私の限られた予算とキャパシティーの中で、スクリーニングを進めるためのガイドラインを作り、子宮ガン検診や前がん病変の治療を母子保健サービスの手順書に統合し、モデル州の保健所での研修の実施を支援しました。低中所得国も現在は感染症に加え生活習慣病など非感染症疾患の罹患も増加し二重負荷になっています。セネガルも同様で、この小さな子宮がん対策支援を入口に今後、がん対策、ひいては非感染症対策への支援につながることを期待したいと思います。

セネガルでは、何かを決めるとき、ガイドラインなどを作るとき、関係者を集めて意見を聞き、それらを吸い上げて作り上げていく、というやり方でした。上司や年長者の前で意見を表現しない国も経験しましたが、ここでは皆意見を表現しました。WHOの人が「東アフリカではWHOのガイドラインを導入するのは難しくないが、西アフリカでは自分たちのものとするまでに紆余曲折あり時間がかかる。」と言っていましたが、セネガルのやり方をよく表していると思います。

世界地図で見るとわかる通り、ダカールはロンドンより遥か西に位置するにも関わらず、グリニッジ標準時でUTC＋０を採用しています。日の出・日の入りの時間が遅く、朝はまだ暗いうちに朝練の娘を学校に送っていき、夕方は職場から帰宅して明るいうちに大きな夕日を見ながら夕食をとっていました。娘は学校でアフリカンダンスを踊り、ダカールからゴレ島という奴隷の積み出し港のあった島までの遠泳を経験し、私は日本語補習授業校のにわか教師をしたりきらきらした海や隣の家の白い羊たちをながめたりして休日をすごしました。

生活も業務も軌道に乗って任期終了に向けて加速がかかっていた３年目、ダカール生活が残り半年を切ったころ、突然断ち切られました。2020年３月にCOVID-19がセネガルにも入ってきました。まだこのウイルスがナニモノかもわからない時期で、日本人は一旦全員避難帰国せよとの指示が出たのです。１か月くらいで戻れるものと思い、休暇に行くのと同じような準備でダカールの空港が閉鎖されるぎりぎりの日に発ちました。４月、５月と状況の改善は見通せないうちに帰任の許可は出ず、日本から

東松島市にて：日本の医療保険制度の研修に参加した保健事務次官、UHC庁長官

20世紀初頭、郵便飛行のパイロットの宿舎だった、ホテル・ドゥ・ラ・ポスト。フランス植民地時代に首都が置かれた古都サンルイにあります。

日本人学校のないセネガルで、あしながセネガルの建物を土曜日午前中借りて授業補習校をやっていました。この日はナイロビ日本人学校の先生が授業の進め方や運営などを指導にきてくださいました。

遠隔でわずかな支援をしたのみで７月に私の任期は終了しました。私たち医療従事者は、臨床や行政にかかわる中で担当患者さんや地域の住民など、それぞれのクライエントへの責任を持ちながら業務を行っています。このような新興感染症の流行時に、日本が協力対象国と何ができるか、どういう支援が可能か、を一緒に計画する、引き出せる支援を引き出す、まさに保健の専門家としての役割であるはずだったのですが、セネガル保健省や多くのパートナーが懸命になる中で帰国したことは痛恨かつ無力さを痛感しました。

2020年11月、セネガルへの再赴任は徐々に開始となり、契約任期の継続している同僚たちはセネガルに戻って行きました。私の後任も近日中に赴任予定です。協力対象国へのコミットメントは、組織として継続し、私も東京から全力で支援して行きたいと思います。